



医療・医薬特化型の物流会社

超低温輸送で少子高齢化を解決

新型コロナウイルスの輸送を受託し重責を果たす

2021年2月に始まった新型コロナウイルスの接種において、奈良県各市から委託され、医療機関や接種会場などへのワクチン輸送を担ったのが五條メディカルだ。同社の設立は20年11月。創業間もない企業が「新型コロナウイルスの輸送」という社会的責任の重い案件を請け負ったのはなぜか。それは同社がワクチンの保管・輸送に必要な超低温物流を強みとし、何よりも社長以外は全員が薬剤師という環境下であったからだ。輸送中も特殊容器で温度管



五條メディカル
代表取締役
原田杏子氏

理を徹底し、さらに薬剤師をはじめとする教育を受けた専門スタッフが輸送に同行。安心かつ安全性を高めることで未曾有の危機での事故「0」という重責を果たした。

「事業承継を見据え、18年に父の経営する五條運輸に副社長として入社しました」と振り返るのは、同社代表の原田杏子氏だ。ちょうど働き方改革関連法案が国会で成立し、「物流の2024年問題」が顕在化した時期だった。「特色を出し、世の中に必要とされ、選ばれる物流会社でなければ生き残れない」。そう感じた原田氏は、医療・医薬に特化した超低温による物流会社という発想に至る。奈良県内には多くの製薬会社があるにもかかわらず、専門の物流会社が不足していると感じたのも理由の1つ。そして何よりも超高齢社会に生きる日本人にとって、健康で長生きするためには再生医療が必要

で、実用化には超低温輸送が欠かせないと考えたからだ。当初は事業部としてスタートする予定だったが、医療・医薬に特化した安心・安全の企業文化を醸成するには、別会社にするほうが確実と判断し、同社の設立に至った。

マイナス197度の保管・輸送技術で凍結卵子も扱う

コロナワクチンの輸送は、2024年3月末で契約満了となり、現在は創業のきっかけでもある再生医療品などの物流に力を入れる。「私たちが目指すのは、本業を通じて社会課題を解決していくこと。創業時は高齢化という課題に着目し、再生医療品を様々な温度帯で安心・安全に輸送することを目指していました。その技術がコロナワクチンの輸送をきっかけにさらに磨かれ、今ではマイナス197度のものまで保管・輸

送できるようになりました。そして改めて今当社が解決すべき社会課題は、少子高齢化だと認識していません。超低温で凍結して輸送する技術に長けた強みを生かし、検体や培地はもちろん、凍結卵子の輸送や長期的な安定保管などを通じて高齢化だけでなく、少子化対策にも貢献していきたい」と原田氏は話す。

また同社は、保管や輸送だけでなく製品の仕分けやピッキング、医療機器の組み立てなども行う。24年1月には超低温倉庫を併設した新拠点を開設したことで、組み立てた医療機器に培地をセットした製品を多様な温度帯で出荷するという注文にも、これまで以上に柔軟に対応できるようになった。

とはいえ、原田氏は「少子高齢化という社会課題を解決するには事業のスケールが小さすぎる」と現状を冷静に受け止める。近い将来に目指す株式公開を通過点とし、「大切な誰かを守るために」という企業理念を全うするためにも「天文学的に事業規模を大きくする必要がある」と力強く語った。